翻訳再訪「きつねの窓」Rendition 1997の理論と実践

宮崎　充保
感性デザイン工学科感性基礎学講座

創造に関して言えば最終形は創造者の勇断によって決まるようである。つまり、最終形はないと言える。翻訳は文章作法に従い、原作者を前面に出して、翻訳者は背後に存在するものではあるが、翻訳者が疑似的原作者になりかわって訳文の中で跳梁する。その意味で翻訳もまた創造的営為と言える。ゆえに、翻訳にも最終形はないと言える。本論では、安房直子原作「きつねの窓」をテクストとして、その翻訳（1991年）の改訂をした。再度訪れて、翻訳実践から最終形への可能性を窺い、その里程標として実践から生じる理論を考察している。改訂版（Rendition 1997）は、表現のコントラスト、文化受容、言語の慣用と表現の結束のありかたを問いかけ、新たな問題を投げかけて来ている。

Key Words: *creation, finality, creative writing, author vs. translator, praxis and theory of translation, contrast, acculturation, idiomatic, coherence*

1．翻訳「きつねの窓」Rendition 1997

安房直子の『風と木の歌』の作品集に収められている「きつねの窓」は、極めて色彩感と喜怒哀楽の情に富む作品である。加えて、ここに含まれるメッセージはどこか、かの名作A・サンテグジュペリの『星の王子さま』を彷彿させ、国語の検定教科書にも採用された経緯がある。作者は筆者に宛てた私信のなかで、消えて行く美しい日本（例えば、本文中に出てくる「縁側」など、年を経るごとに木の美しさが生きてくる日本式の家屋）を作品中に描き残しておきたいと述べておられるとおり、翻訳者泣かせの純日本が出てきて、絶えず翻訳者に挑戦状がたたきつけられる作品である。

翻訳を実践する場合、翻訳者は原典に相当の思い入れ、言い替えれば、入れ揚げがなければ翻訳実践を続けることは不可能であることは別の論述のなかで述べた。商業ペースを考えなければ、作品は翻訳者の好みに任せて選ばれる。この作品は上のような単純な理由からも、入れ揚げのできる作品である。翻訳実践に工夫を迫るところが多々ある。それは、一つに、色彩感と感情の表現、二つに、純日本の英語での表現、三つに、生命と流れゆく時間を扱うメッセージの伝達、こうしたところが翻訳者である筆者の興味をかきたてるからである。同時に、1981年から取り組みながら、いまだにこれでよしとするに到らない事情にもなっている。

今回は、1991年に一度発表したものを丹念に読み返し書き写して、翻訳者自身の翻訳に成長があったかなかったかを模索する翻訳実践であった。

2．実践現場

2.1．色彩感と感情

日本語は英語に比べると「あいまい」である、と一般的には言われる。しかし、この言い方こそ実にあいまいである。決して的を得ているとは言えない。なぜなら、言語、別言すれば、文化にはそれぞれに固有の論理と慣用があり、日本語も言語としてはあいまいな言語とは言えない。語用論の分野で考えてみるに、ある日本語表現があいまいだとしたら、それは、あいまいさを生むように、そのような言語使用の効果を生みだすように、「正確に」日本語は用いられているのである。英語でも、たとえば、ある発言に対して、相手を傷

©1997 The Faculty of Engineering, Yamaguchi University

つけないために、"No"とは言わずに語尾を上げながら、"Ye-es"と言って「あいまいな」表現でその発言に反対することがある。日本語で「ありがとう」と言うとき、あくまでもこの表現は正確なお礼の表現であり、特定の使用環境のなかに埋め込まれると、ここに到って初めて意味が生じて、申し出られた好意を受け入れる意味と断わる意味に分かれる。しかし、どちらにしろ、好意に対してはお礼を言っているのである。英語ではそれを"(Yes,) Thank you"と"No, thank you"に分ける。つまり、意味の紡ぎ出し方が日本語は言語構造というよりは状況依存型であり、英語が構造依存型であると言える。

そうした日本語の状況依存型のなかで、多言を好まない文化が抑制をよしとするために、英語に比べると状況表現が大げさにならないことは確かである。それは結果として、形容語を多用しないという言語状況を生みだす。安房直子のこの作品でも、原典としては同じことが言えよう。

構造には明確な「形」がある。従って、翻訳ではここに登場する色彩感や喜怒哀楽はそれだけの「形」を表に表わすだけの言語使用が要求されてくる。翻訳者にはイメージの造形力に加えて、改めて言語構造の構築を通した強い造形力が要求される。その要求に答えるには、まず第一に、造形の際に用いる語彙の選択が重要性を持つ。今回のRendition 1997では、色彩の輪郭、感情の切り出し、こうしたものにはっきりとしたコントラストを作り出すことに焦点を絞った。

一例を挙げる。

「ねえ、お客さま、ゆびをそれめるのは、とてもすてきなことなんですよ。」
というと、自分の両手を、ぼくの目のまえにひろげました。
小さい白い両手の、親ゆびと、ひとさひゆびだけが、青くそまっています。きつねは、その両手をよせると、青くそめられた四本のゆびで、ひしがたの窓をつくって見せました。

"Sir, wouldn't you know? To get your fingers dyed—nothing's more fantastic. It's just something. Take my word for it, sir."

So saying, he spread his own hands so my eyes could see.

And to my eyes **the blue** leapt from **the thumbs and index fingers**—the rest buried in **the whiteness of his little hands**. The fox drew his hands together and, in my eyes, made a diamond-shaped frame with the four fingers that were painted blue.

この一節では、「白ぎつね」と「ききょうの青」が作品の主要な道具立てになっていて、従って重要なのは、「白（い両手）」と「（親ゆびと、ひとさしゆびだけが、）青（く）」のコントラストである。両者とも、色は名詞の属性として日本語では表わされているが、主人公の目に留まるのは、両手の「白」に対峙する四本の指の「青」なのである。そこに、「そまってい」る意味がある。1991年の翻訳では以下のようにしている。

I saw that, of the fingers of his little **white hands**, only **the thumbs and index fingers** *were dyed* **blue.**

前者は二つの色が動的な動詞 "leapt" と静的な動詞 "(being) buried"によって動きの対照をも得ている。が、その代わり、「そまって」が犠牲となり、含意をまって背後に消えてしまっている。つまり、文脈からその意味はご察しを乞うという姿勢に変わっている。問題点は散文としての可否である。

2.2.「純日本」——文化受容の問題

翻訳者の使命は、外国語から母国語に移すとき（本論では、さかしまに行っている）母国語がいっそう豊かになるようにすべきである、それが使命であり、翻訳の黄金律である、ということで西洋世界の思想・文化的命綱としてギリシャ・ローマ古典の翻訳が繰り返し行われている。* そして、それが、翻訳時の時代と翻訳者の思潮すら反映している。20世紀の日本においても、例えば、わずか10年程度の時間差で福田恆存と小田島雄志のシェークスピア訳は時間差を含みながら、そうした差を十分に窺うことができる。それが、しかも、翻訳劇として繰り返し上演される以上、シェークスピアは程度の差こそあれ、日本語、日本文化のなかに根づいていると言える。

この作品の作者自身が日本伝統の美しいところを作品に残しておきたいという第一の願望をもっているならば、翻訳者はたとえさかしまな言語上の翻しを行うにしてもその願望は異文化のなかに、

* John Wain, 'Going Home' in *Sprightly Running: Part of an Autobiography*. London, Mcmillan, 1963.

すなわち、翻訳文のなかに脈打っていなければならない。それにアプローチするために、純日本を一度アングロサクソナイズして、つまり、膝を屈して英語の既存の言葉を借りて純日本を英語文化の中に溶かし込むか、そのままをローマナイズして炊いた米に混じった小石のようにして訳文のなかに置くか、いずれかの方法がある。どちらの方法を採用するかは翻訳者の翻訳理念と態度に関わっている。どちらが受容されやすいかは、すぐには断じがたい。今回の場合、まず、前者の方法をとり、十分に説明がついたとおぼしき頃合を見計らい、以降は後者の方法を取った箇所がある。読者に始めから消化不良を起こしてもらいたくはない。しかし、そのものではなく類似で受容がなされるなら、「純」日本の純度が落ちてしまう。

この作品の中心の材料である「ききょう」に対してそのような扱いをした。最後まで、"bell-flowers"にすると、東アジアにしかない植物のイメージが結ばれない。「あずき」が"adzuki"、「葛」が"kudzu"となったように、「ききょう」も辞書の中での植物だけではなく、日本語で「アップルパイ」「パイナップル」と言えば単なるカタカナの羅列ではなくその実像が浮かぶように、英語文化のなかでもっと市民権を得ればよい。* そうすることで、英語文化も言語を通して多様化するのである。

しかし、この作品の作者が最も思い入れを持ったと言う「縁側」は今回も、ヒンズー・スペイン語あたりからの借用語で英語圏に定着している"verandah"を用いるより手がなかった。訳文のなかに、上のような方法を取り込むならば、説明として補足するしかないのである。「ききょう」は提喩的代用表現（bellflower）を用いれば後に解決がついたが、「縁側」はそれができなかった。作品のなかで、「ききょう」以上に踏み込んでいないこともその理由の一つである。

---

* *adzuki:* [Jap.] The dark red edible beans of the annual leguminous plant *Vigna angularis*, cultivated in China and Japan; the plant itself. *kudzu:* [Jap. kuzu.] In full, kudzu vine. A perennial climbing plant, *Pueraria thunbergiana* (or *P. lobata*), of the family *Leguminos*, native to China and Japan, and cultivated elsewhere as a fodder plant, an ornamental, or an aid in the prevention of soil erosion. *kikyo:* [Jap.] A local name for *Platycodon grandiflorum*, a herbaceous perennial of the family *Campanulace*, native to China and Japan; the Chinese bell-flower. (*The Oxford English Dictionary*, 2nd ed.)

2.3. メッセージの伝達性

以下のことは、稿を改めて論じる必要があるので、ここではその要点だけに留める。言語使用は論理と慣用によってなされる。つまり、一つに論理的側面から、言語文化の思考様式、そしてそれによって紡ぎ出される文構造と文章構造がある。もう一つは慣用である。文化の中で生きて行くなかで無意識に言葉と言葉の、文と文の特別なつながりは身につくものである。ある国語を外国語とする場合それをまるで母国語のように使用するには、無限の時間と労力を費やしても使用できるようになるという保証はどこにもない。蝿叩きを持って、一匹、一匹と蝿を追いかけては仕留めるといったような気の遠くなる作業であるとしか言えない。

そうしたなかで、メッセージの伝達を論理構造の側から処理する一方で、どのようにより高い、より自然なもの（慣用性の高いもの）にするか、これは最大の難題である。そのためには、慣用という言語現象に目を留めることが必要となってくる。一つの方法としては、言葉と言葉の牽引力を観察する方法があると言える。イメージの素直な連結と連帯を言葉の側から模索することであろう。これは、表現の文レベルで言えることである。文章レベルでは、結束性あるいは論旨の自然な流れを求める工夫をすることがあると考えられる。

今回の再訪では、まず、この点を強く意識して作業を行った。以下の一節を1997年版と1991年版とで比較されたい。

ゆびでこしらえた、小さな窓の中には、白いきつねのすがたが見えるのでした。それはみごとな、母ぎつねでした。しっぽを、ゆらりと立てて、じっとすわっています。それはちょうど窓の中に、一枚のきつねの絵が、ぴたりとはめこまれたような感じなのです。
「こ、こりゃいったい……。」
ぼくはあんまりびっくりして、もう声もでませんでした。きつねは、ぽつりといいました。
「これ、ぼくのかあさんです。」
「……。」
「すうっとまえに、だーんとやられたんです。」
「だーんと？　鉄砲で？」
「そう。鉄砲で。」
きつねは、ぱらりと両手をおろして、うつむきました。これで、自分の正体がばれてしまったことも気づかずに、話しつづけました。
「それでもぼく、もう一度かあさんにあいたいと思っ

たんです。死んだかあさんのすがたを、一回でも見たいと思ったんです。これ、人情っていうものでしょ。」

なんだかかなしい話になってきたと思いながら、ぼくは、うんうんと、うなずきました。

1997年☞

Through the tiny window of his fingers, my eyes took in the view of a white fox. It was a grand view of a mother-fox, which squatted on her haunches in a still, quiet manner. The brush of her tufty tail, held the right way up, gave a sway in the air. It was just as if a painting of a fox were fitted pat into this window-frame.

"Wh-what in the world . . . ?"

Sheer astonishment choked my voice and I only gasped. Into this dazzle of mine, the fox came forlornly with:

"This is my mother."

A beat of silence.

"A shot went *bang* and she was dead, a long, long time ago."

"*Bang?* With one shot of the gun?"

" 's right. With the gun."

The fox undid the diamond as he let his hands down, and dropped his head. Not knowing he had now betrayed himself, he went on to say:

"I longed to see my mother again at that. I hankered after her as she'd been in life, just one good glance was fine with me. Is this the feeling that comes naturally to humans, or is it not?"

I felt it was getting a bit sentimental, but then I kept nodding in real earnest as I listened.

1991年☞

What I saw in the little window of his fingers, was the figure of a white fox. It was a mother fox of stately magnificence, squatting still on her haunches, the broom of her tail held upward wavering in the wind. As if all this were a painting of a fox precisely fitted in the framework of a window.

"Wha-what the heck . . . ?" This was all my voice could say in my sheer astonish-ment.

Forlornly, the fox put in a word—"This is my mother."

" . . . . "

"*Bang* came the sound, and she'd been killed—a long, long time ago."

"*Bang?* With a gun?"

"That's so. With a gun." The fox swept down his hands apart and dropped his head. Unaware that he'd let all this betray him, he went on, "However it was, I longed to see her once again. I had a hankering after another sight of my poor mother in life who's no more, if just one more sight. Isn't that a natural 'human' feeling? Is it not, sir?"

I nodded, *by all means,* while I was thinking this was somehow getting to be a touching story.

慣用と結束の点で、大幅な修正をしている。翻訳者自身は、1997年版では1991年版に比べて、無理に言葉を連ね、何とか原典の意味へ持って行こうとする苦し紛れの強引さがより薄れて、言葉同士の結び付きそして流れがより自然になっていると思っている。

絶えず慣用的な英語を求めることは最大の課題である。縦のものを横に並べ仕立て上げることのみに窮々として、苦し紛れに強引なことをしていたのではないか。木に竹を接ぐようなことをしていたのではないか。そのために、慣用や結束への配慮の意識すら乏しく、むしろ犠牲にすらしていたのではないか。こうした疑問が1991年以来消えやらず、再訪の欲求が高まり、Rendition 1997の出現を見るのであるが、そこでは強引に引き据えてしまったと思われる箇所を出来る限り解決しようと図った。そのような箇所を見い出して手直しするための目安としたことは、いたずらなパラフレイズに逃げ込もうとして、表現が過剰に陥ってくどくなり訳文（一文）が長くなっていないかと問い返したことである。根拠の薄い論理のように思えるが、慣用の摩訶不思議な正確さがそこにあるように思われる。

幸田文は作品『闘』のなかで、白壁を陰りなく白壁と見せるには、真っ平らに塗ってはいけない、ものの反射などの具合によって陰影ができるのでそこを計算に入れながら塗るときに凹凸をわざとつける、というようなことを語っている。職人芸の配慮である。凹凸をもってでき上がった白壁が真っ白に見えるならば、術だけでなく芸の域にも達していると言えよう。ここには論理の裏付けがあるにしても、おそらく、アルゴリズムを超えた、いわば、目分量（rules of thumb）の持つ確かさと言えるだろう。往々にして根拠を欠くが慣用の威力とでも言えるものであろう。素人に近い者がそれに与することは、大きな危険を伴う。しかし、それも練習のうちの一つと考えれば実践をするに

しくはない。

翻訳論でいつも問題にされるのが、等価である。命題の等価と、言語の等価の両者が考えられる。これがはなはだしく破られるときには、どちらかの等価に欠陥があるはずである。実践の浅い翻訳者としての筆者から言えば、原典に比して長すぎるような訳文であれば、訳文にどこか無駄がある、そのために読者を退屈に追い込みかねないと考えたほうがよさそうである。そっけないのも原文の読み込みと扱いに問題があると考えられる。訳文の長さを目分量で測りながら、それを是正することは絶えず必要であると考える。そして、それが、翻訳文のサービス度、慣用度の指標と見てよい。

メッセージの達意性に関する、Rendition 1997の翻訳態度は1991年のそれとは次の点で大きく異なっている。原典であるこの作品は、子供を対象にしているにもかかわらず、メッセージに深さもあって、決して子供だけに留まらず大人をも読者の対象として巻き込んでいることである。読者へのサービスを考慮に入れるなら、複雑な言語構造をとらない。あまり難しい語彙は使用しない。表現そのものに晦渋や韜晦、すなわちケレン味があってはいけない。このことを心掛けた。このケレン味への荷担こそ慣用を壊すものであると考えてよい。言葉や表現、文構造に目を惹くようなところがあれば面白いとしか思えなかった意識が薄れ、あくまでも、読みやすいようにという言語的選択をよしとするように考えるようになったことである。やさしく言い表しながら、味や深みを持つものが文章作成法としては最高であるはずである。物語は作者と読者の共同作業によって語られる。読み進むうちに語りの世界へのめり込み、読者自身、気付かないうちに語り手になる。それは、物語論あるいは語り論（narratology）のStanzelの言う語りの中にある推論性（discursiveness）に起因するものである。

Rendition 1997にそうした味や深みが感じられるという自負は翻訳者としては、いまだ持てない。しかし、あきらかにケレン味を愉しんだような訳文は書き改めている——はずである。訳文をコンピュータアプリケーションのNisus Writerに搭載されているツール文字数で調べると「読みやすさ84、学年レベル７」という数値が得られた。＊英語国民で言えば、中学１年生が読めて、難易度から言えばやさしさでは84/100という機械の判断である。

３．問題と今後の課題

表現にコントラストをつけることは、修辞的なバイアスが大きい。伝達のための修辞はいかなる場合でも文章作成には存在するが、慣用や結束を断ち切って表現効果を狙うのには往々にして危険が伴う。厭味と感じられることのほうが多い。良く言えば言葉自身のきらめきやロジカルジャンプによる切り出しの鮮やかさを得ることにもなる。言い替えれば、散文詩という名のもとに好まれ、また嫌われる。なぜなら、コード化に手間取った分だけその解読にも手間がかかり、読者には理解に要する時間が長くなり、想像力は活性化されても、負担になることはまぬかれないからである。しかし、散文のゆるやかさを犠牲にまでして、ケレン味抜きに修辞意識を高める必要もある。語りの手管を知らねばなるまい。翻訳者にはそうしたことへの自覚と自戒が必要であろう。

翻訳によって国語が崩壊の憂き目に遭う可能性があることも翻訳者は知っておかなければならない。1996年に封切られた邦画『Swallow Tail』の舞台となる仮想の移民の町Yen Townでは日本語、中国語、英語が混在し、奇妙な言語（日本語？）が用いられていた。文化受容の立場から、新しい言語の誕生は否定されるべきものではないだろうが、従来の言語とのギャップが大きく、メタ言語の使用というさらなる翻訳が強要されてくる。形成された言語は心地よさ、美しさの点から生き延びて来ているはずである。翻訳を文化受容とするならば、言語は心地よさや美しさに向かって研ぎ澄まされなければならない。

論理と慣用は二言語が異文化同士であるかぎり、遅々たる営みの果てにわずかな収穫として得られるものである。おそらく、絶えず異文化に接触しながら、書くためには読む、読ま（読め）なければ書けない、という自覚のもとに実践が進められ、

＊ ちなみに、1991年の翻訳は「読みやすさ83、学年レベル8」である。しかし、この数字も根拠があるものとは言えない。同じアプリケーションに搭載されている英々辞典を拠り所として単語の難易度から測ったものであろうし、文構造、文体までは認知できないはずである。さらに、一文章の平均単語数は12—15：最大値は40—55（1997—1991）となっている。

途上に理論が形成されるはずである。17世紀のジョン・ドライデンの翻訳論は、最終的にはこのあたりのことを示唆しているように思われる。

翻訳は他の創作と同じで、最終形がない。しかし、Rendition 1997を通して、(1)色彩や喜怒哀楽はそれぞれの区別がはっきりしているので、修辞学的アプローチからコントラストで表現を澄ますという歩を一歩進めた取り組みができ、(2)文化受容が伝統文化と異文化に挟まれて、より体系的な方法を採りつつ固有の文化を異文化の中へにじり込ませることも考えられ、(3)表現の慣用度の向上により、語りの読者側の推論性を助長して、共に一つの物語の形成を狙うことにより、翻訳文の結束性（coherence）を保持させることができるのではないか、ということが言えそうである。そのために、翻訳の実践と理論にもう少しはっきりとした輪郭が与えられたと言える。その収穫をもたらしたRendition 1997は、やはり、長いみちのりの途上に生まれた6年前の1991年のそれからは成長したものである。しかし、途上であるゆえ最終形ではない。時間が経てば再び訪れるであろう。

（1997. 4. 15 受理）

REVISITING *THE FOX'S WINDOW*: A PRAXIS AND THEORIZING OF LITERARY TRANSLATION THROUGH "RENDITION 1997"

Mitsuyasu MIYASAKI

Dept. of Cognitive and Perceptual Sciences and Design Engineering

In general, it seems that it requires staunch belief in his or her literary creation of the author to determine it to be his or her last draft since he or she can infinitely give dibs and dabs to make it more satisfying. In a word, there is no such thing as his or her last draft. Neither is there to a translation of a literary work, where, with the author in front, the translator prowls and prances behind. In this sense, a translation deserves to be called a literary creation.

The present author revisits the source text which he executed into English once in the past, back in 1991, to look into what rules are predominantly in action behind his praxis of literary translation. In the process of redoing the same old source text, a new awareness has dawned upon him that employment of certain rhetorical devices makes images pertaining to the source text stand out with contrastive effect, bringing the proposition more into focus; that idiomaticalness of the target language is to be had in his target text when the language itself is more explored in the nature of its idiomatic use, which is the toughest part of his engagement because it is seldom readily accommodated with translators at large who render their mother tongues into foreign languages, not common practice; and that consideration of coherence in his target text will let the target language come less unnaturally in that this again evokes in him the necessity of idiomatical use of the target language. He has also gained alternative approaches to translating something genuinely particular to the culture of the source languate and text. The act of translating is the act of acculturating to the target language what is involved in the source text .

Since translation is thus done on the huge arena of language with sundry properties, the translator must be prepared for the horrendously immsense proposition that he or she will plod an interminably long way before he or she can nod "yes, this is it".

APPENDIX

Awa Naoko

The Fox's Window

—from *The Songs of Winds and Trees*—

Rendition 1997

Miyasaki Mitsuyasu

WHEN WAS IT?—my memory fails me now, but, believe me, it happened when I got lost in the mountains.

I was on the way back to my cabin. Gun on my shoulder, I was absently plodding the same path I always walked. That's right—walking, I was off in the clouds at that time, say, mooning over the girl I'd once been very fond of.

I had just taken a turn where the path was forked, when suddenly it struck me that the sky overhead was bedazzlingly bright—as if it might have been blue glass, so polished it left no spots . . . and the ground under my feet, too, gleamed a dim blue, or was it my fancy?

"What?" escaped my lips.

For a split-second I stood lost where I was. I blinked a couple of times, and what did I see? Yes, I saw a vast stretch of open field rolling out far beyond; it was not the same old cedar grove I was wont to see. What surprised me more was that the field was carpeted all over with purple bellflowers.*

I gulped at this sight. My goodness! Where and how could I have possibily taken the wrong way and come out, like a shot out of hell, to a place like this? Just to think of it: in the first place, in this part of my mountains, had there been a flower field like this?

I ordered to myself:

Turn back right away!

Why, all that spread in front of me was just too beautiful. It was such a stunning view that it somehow frightened me into recoiling from it.

But all the same, there was a pleasant breeze blowing over the field, and the flower field went on and on and on, knowing no end. It was too good to turn on my heels there and then. It was a shame to leave it unexplored. I kidded myself along:

"Maybe I could use a little rest here."

Hoaxing myself, I sat down and began to mop my brow.

Just then, I caught a glimpse of something white flashing across in front of my eyes. I sprang to my feet, standing bolt upright. I saw a row of bellflowers stirring violently to left and right in the wake of the white creature as it slashed its way through the flowers like a rolling ball.

Doubtless, it was a white fox, and it was still a youngling, even. Snatching my gun, I burst into a sprint to run after it.

Mere cub as it was, however, it ran so fast it looked like I was no match for it, run as I did for all I was worth. Execute it with a shot of my gun, *bang*, and that would have been the end of it, but that was not the name of the game. What I wanted to do, if possible, was to find out the fox's lair and make the parent fox mine that was hiding there. The fox ran on and hardly had it made a knoll before it plunged into the flowers, disappearing once

---

The original title is "Kitsune no Mado" in *Kaze to Ki no Uta* (Tokyo: Jitsugyononihon-sha. 1st ed. 1972)

* Chinese bellflowers or balloonflowers, officially named *Platycodon grandiflorum*, blooming from August to September exclusively on Japanese, Chinese, and Korean sunny hill- and mountainsides, standing 2 to $2^1/_2$ ft. They load themselves with flowers at the end of straight slender stalks or on branches. The flowers have also been appreciated since olden times in the garden or in the vase so arranged.

and for all who knows where.

Arrested in my tracks, I blanked out. I stood lost like a fool. It felt as if I had been deserted by a daytime moon in the brief moments my attention had been drawn from it. Ah, the fox gave me the clever slip, I sighed.

Into this plain blankness—

A strange voice came from behind:

"Good day, sir. May I help you?"

Surprised, I turned back and found myself standing in front of a small shop. The entrance was hung with a sign lettered in indigo, saying:

Dyer: Kikyo *

Under the sign was a solitary figure, a boy assistant in an indigo apron** standing little and prim. Straightaway I got the hang of it:

Aha, it's that little fox's shenanigans and that's that!

Now I was in the know, secret amusement bubbled up from deep inside me, and I planned my tactics. Very well, I was determined, I'll let myself be strung along and take what this little-boy fox has to give, and then this little creature will be mine.

Now I gave a smile with all the affability I could put into it and said:

"May I rest for a little while if I may?"

At my request the little-boy fox beamed:

"Certainly, sir. Certainly."

And he showed me into the shop.

There inside the shop was a dirt-floored room. It had chairs which were made of white-birch —believe it or not, there was a whole set of five. And he had a table, too, and a handsome one.

"Such a nice place, isn't it," I said as I sat on one of the chairs, and took off my cap.

"Thank you very much, sir," replied the fox.

From the depths of the shop, he solemnly brought me tea.***

"Dyer's workshop, eh?" I said half-teasingly, "What darned things do you dye?"

Point-blank, the fox picked up my cap from the table and pronounced:

"We dye anything, sir. Look, sir, you can get a cap like this dyed a wonderful blue."

"Oh no, don't ever give me that!"

Flustered, I retrieved the cap pell-mell and reminded him:

"I have no desire whatsoever to put a blue cap on my head, understand?"

"Oh, you don't. Well then, sir," said the fox. He ran his eyes with a searching gaze over my clothing and suggested instead:

"How about that scarf? Or those socks, sir? Pants, jacket, sweater, anything you name, sir, and they'll all come out in such a marvelous blue. Take it from me, sir."

I frowned in disgust. What the hell was this little devil all that keen to dye anything that belonged to another for, anything his eyes fell on?—and the thought of this got my dander up.

But on a second thought it entered my mind that not only humans, but foxes, too, were cut out the same for business: or, that the fox was all keyed up to make some money for the service he'd give. After all, he was bent on treating me as his customer.

I nodded an assurance to myself. Thus assured, I felt bad to order nothing for any business he could do when he did so much as to treat me to the tea for a simple rest. Thinking I'd get him to dye a little thing I had on me, say, my handkerchief, I had thrust my hand into the pocket, when the little assistant screeched at the top of his lungs:

"Oh yes, this is the way to go! Sir, I'll dye your fingers."

"My fingers?" I got huffed, and I swore at him:

"Dyed fingers, do you say you're going to give me? Oh shit, not over my dead body!"

As if he cared, he replied with a broad smile breaking on his face:

"Sir, wouldn't you know? To get your fingers dyed—nothing's more fantastic. It's just something. Take my word for it, sir."

So saying, he spread his own hands so my eyes could see.

And to my eyes the blue leapt from the thumbs

---

* That is, bellflower; originally called so in Japanese. Since the plant is exclusively peculiar to East Asia, the English name does not quite fit, hence *kikyo* hereafter.

** A coverlet for the lower frontal part, from the waist down to the middle of the shins.

*** That is, green tea.

and index fingers—the rest buried in the whiteness of his little hands. The fox drew his hands together and, in my eyes, made a diamond-shaped frame with the four fingers that were painted blue. And hanging the frame over my eyes, he said in all happiness:

"Sir, take a peep through this, will you?"

"Er, er, umph?" I uttered a mumbo-jumbo, not anxious for it.

"Come on, sir, look, one look is just fine."

Willy-nilly, I peeped into the finger-window. And my eyes bulged.

Through the tiny window of his fingers, my eyes took in the view of a white fox. It was a grand view of a mother-fox, which squatted on her haunches in a still, quiet manner. The brush of her tufty tail, held the right way up, gave a sway in the air. It was just as if a painting of a fox were fitted pat into this window-frame.

"Wh-what in the world . . . ?"

Sheer astonishment choked my voice and I only gasped. Into this dazzle of mine, the fox came forlornly with:

"This is my mother."

A beat of silence.

"A shot went *bang* and she was dead, a long, long time ago."

"*Bang*? With one shot of the gun?"

" 's right. With the gun."

The fox undid the diamond as he let his hands down, and dropped his head. Not knowing he had now betrayed himself, he went on to say:

"I longed to see my mother again at that. I hankered after her as she'd been in life, just one good glance was fine with me. Is this the feeling that comes naturally to humans, or is it not?"

I felt it was getting a bit sentimental, but then I kept nodding in real earnest as I listened.

"And then," the fox continued, "one autumn day like today, a gust of wind rustled past over the *kikyo* field, stirring the flowers, and all the flowers said together in one voice:

" 'Young one, dye your fingers in our color and make a window of them.'

"I took it at their word. I picked heaps and heaps of *kikyo*, squeezed juice out of the flowers and with it painted my fingers. And then, look, there you are!"

So saying, he extended his hands and made another window.

"You know, sir," the fox said, "from then on, I'm not a lonely, wretched, motherless fox any more. Why, you know, through this window I can see my mother any time I want."

Completely carried away, I gave one hearty nod after another as I listened to him. The truth was, I was alone myself.

"I want to have such a window, too," I blurted out loudly like a little boy. And the fox turned radiant, his face glowing in overpowering delight.

"Very well, sir," he said. "I'll set to work right away. Spread your hands down over there, sir."

I rested my hands flat on the table while the fox fetched a brush and plate holding the flower juice. He got to working: he generously loaded his brush with the blue liquid and began to paint my fingers brush after slow and elaborate brush. Shortly, my thumbs and index fingers turned *kikyo* blue.

"Right, here you are, sir. Now give it a try and make a window with those fingers of yours, sir."

My heart was pounding against the chest as I made a diamond-shaped window. And then, all nerves, I brought it up to hang over my eyes.

What do you think happened then? In the screen of my small window a picture of a little girl was projected. She wore a one-piece dress with flower patterns and a hat tied with a ribbon. It was a face I was familiar with. It had a mole beneath the eye.

"My eyes! Isn't that her!"

I jumped with joy. She was the girl from old times, whom I had been very fond of and then again whom it was absolutely impossible to see again.

"Don't you see, sir? Isn't it something to get your fingers dyed?" The fox cackled innocently like a schoolboy.

"It is, it is. It's just fantastic."

Thinking I'd pay for what I'd just been given, I fumbled my pockets but unfortunately I found not a single copper in them. So I said:

"I'm sorry it just happens that I dont't have a single copper on me. However, I can give you anything else that belongs to me. Name it and it'll be yours, my cap, my jacket, my sweater, my scarf, anything at all."

At my offer, the fox said:

"If you insist, give me your gun."

"My gun? Well, that'd, you know, umph . . ." I dropped what'd have followed: . . . *inconvenience me.* But on the second thought of the fantastic window I'd only just gotten, my gun was nothing hard at all to part with.

"Very well, it shall be yours." Like a bighearted man, I gave up my gun to the fox.

"Thank you very much, sir."

The little fox bent in a quick, solemn salutation and took my gun. And in return—what a kind fox!—he gave me *nameko** to take home. He said:

"Put into your broth this evening, sir."

Even more to my surprise, the mushrooms were put in a plastic bag, ready to take away.

I asked the fox to show me the way back to my cabin. It was, as I found, simple as chessboards. He told me that behind the shop was the cedar grove, and that a walk for some two hundred yards through the grove would take me out to my cabin. After I had thanked him, I went around behind the shop as I was told, and I found myself standing at the threshold of the grove I was familiar with. It was warm and peaceful in the same old haven with the resplendent autumn sun spilling its glints through the trees.

"Well I never."

Marvelling, I ahed and oohed—this part of the mountains, every inch of which I'd believed I had known inside out, had hidden a secret path like this. And such a gorgeous flower field and the shop kept by a kindhearted fox . . . I got so heady I broke into song through the nose. Walking along, I drew up my hands together and made a diamond for a second time.

Looking into the window, I saw it was raining. A fine rain was silently falling.

And from beyond the drizzle came looming up a yard, the good old yard I'd used to know. And further across the yard was an old verandah. There under the verandah were a pair of children's boots, neglected and exposed to the rain.

Those . . . those are mine!

In a flash they relived in me, and set my heart thumping. A figment of imaginatin came over me if my mother, in her apron and white towel covering her head,* wouldn't come out any second to take the boots away. I could hear her saying:

"You bad boy, you've left 'em in the rain."

In the front yard there was a vegetable garden she tended, where a cluster of green *shiso* herb** was soaking in the rain like the next thing. Ah . . . wouldn't she come out into the garden to pick the leaves!

It was a shade light inside of the house. It was lit by an electric bulb. I could hear cackles of two children in snatches mixed with the music that was coming from the radio. Ah, yes, that voice used to belong to me, and the other to my sister who was no more . . .

I drew a deep, long sigh and brought the hands down. For some reason or other my heart ached, making me feel so forlorn. I must tell you, my childhood house had burned down. That good old front yard had gone for good.

Notwithstanding, I bargained for such fantastic fingers, yes, fantastic indeed! Resolved that I'd take the best care I could of them for ever and ever, I proceeded through the grove.

AND YET, WHAT DAMNED THING had I been and gone and done on coming back to my cabin?

Ah, woe is me, I had washed my hands, thoroughly unaware what I was doing. I did it simply out of the habit that had been with me over the years.

Damn it, my heart cried out, but it was already too late. The blue paint on my fingers had come clean off in a jiffy. No matter how my fingers minus the paint formed the diamond, all that came into it was the same old ceiling of my cabin.

---

* An edible fungus of the family *strophariaceae, pholiota nameko* by official name: cooked into a soup, a broth, etc., as one of the assorted vegetables.

* So that her hair would not go undone or uncouth as she did her chores. It is a Japanese towel, thinner and coarser in texture.

** *Shiso, perilla frutescens crispa* by official name, is used in Japan as a herb, which has two variants distinguished by their colors and the ways in which they are used as food: one green for immediate service for eating and the other reddish-purple for preserving plums, giving up its color and flavor to them.

Dazed, I spent the rest of the night with my tail between my legs—the mushrooms I had received from the fox never entered my mind.

The next day, I decided to visit the fox at his shop again and have my fingers painted over. Once I had settled for it, I did a big lunch of sandwiches for what he'd do, and went into the cedar grove.

I went on and on in the grove, but all along it was the same old grove. There was no way out to a *kikyo* field, not a hint of it anywhere at all.

Since then I had wandered the mountains for days and days and days. The faintest cry of a fox or the tiniest white shadow that rustled among the trees would, once for all, set me all ears and searching in the direction. But it was to no avail. That was the first and last I saw of the little fox.

For all that, once in a while I go and attempt to form a diamond with my fingers, paintless as they may be, in the fond hope that something might pop into it. A fat chance. This often makes folks laugh at me and say that I have a peculiar way.